



～夏休みお祭りエピソード受賞作品 10作品～

うちには、高校2年生になる息子がいます。

小さい時からお祭りや盆踊りが大好きな子でした。特に盆踊りは踊るのが大好きで小さい頃からよく輪の中に入って踊っていました。

しかし、小さい頃よく踊っていた子でも、特に男の子は踊っているのを見られるのが恥ずかしい、格好悪いと歳を重ねる毎に踊らなくなるものだと思っていましたが…うちの子は母親の私が踊りに入らなくても輪に入り、歳を重ねる毎に盆踊りの踊りが上手になり、毎年行く近所の盆踊り会場では、踊りの先生が待っていてくれる様な状態に……。ここ数年はコロナ禍で盆踊りが中止になり、参加できておりませんが、よくやく今年は1会場だけ開催が決定しました。

息子に「みんなに見られて恥ずかしくないの？」と聞いたところ…「だって盆踊りって楽しいし、おばあちゃん達が、喜んでくれるから。待ってたよーって嬉しいじゃん」と…。

今ではその息子も、救急救命士になる夢を追い受験に向かっていますが、人に喜ばれる事が大好きな息子にピッタリな夢だなと全力で応援しています。

「おばあちゃん達、みんな元気で今年も会えるかな？」と楽しみにしている息子を誇らしい気持ちです。

神奈川から群馬に引っ越しして来て初めての夏祭り、娘が小学生、地域の夏祭りでガラガラポンのくじ引きをやりました。

どうせ白い玉のハズレかと思いまや金色の玉が出てきて一等大当たり～とカランコロンと鐘を鳴らしてくれました。一等一輪車で～すとの事。

娘と私、大喜びしていると奥の方から係の人が持つて来たのは通常ねこと呼ばれる農作業などに使う手押しの一輪車でした。

娘とえっこれ？って感じです、二人で大喜びしていたのを見ていた祭りの責任者がそんなに喜んでくれて嬉しいよ～って言われてそそくさと帰ってきた娘と私。勘違いして騒いだのがとても恥ずかしくまた可笑しくてたまらない今でも昨日のように思い出すお祭りの一コマです。

夏祭りといえばお神輿！！！私のひいおじいちゃん世代からお父さん、そして私、娘もお神輿が大好きです。そんな私のお父さんは今年で 60 歳。仕事柄重いものを運んだり腰を痛めることが何かと多く。私が物心つく前にお父さんは神輿を担ぐことを引退しました。

…が 4 年前。地元のお祭りで古くからの知り合いに会い「一緒に担ごう！」と誘われてお父さんは「腰を痛めてからはもう担げないから見てるだけで…。」と言い残しトボトボどこかにいなくなってしまいました。誘われても担げない自分にガッカリしてしまったのかと思い私は悲しい気持ちになりましたが……しばらくすると家の方から、捻りハチマキ、若草色の半纏を着たお父さんが歩いてきて何も言わずお神輿に近づきワッショイワッショイと担いでいたのです！！

あまりの衝撃にびっくりしましたが…私も嬉しくなりすぐお父さんと並んで担ぎ、感動したの覚えています。写真で見てただけのお父さんの担ぎ姿、目の前で担いでいるお父さんの嬉しそうな顔、そして親子一緒に担げた事全て私の夏の思い出です。

お父さんから教えてもらった神輿愛は、娘にも教えていくつもりです。

毎年夏になると、地元の公民館の裏にある空き地で夏祭りが開かれていました。小学校 5 年生の時、浴衣に身を包み、友人と意気揚々とお祭りに出かけた時のことです。この祭りでは毎年、「シークレットイベント」というものがあり、その名の通り当日に内容が明かされるイベントが用意されていました。過去には、吹き矢チャレンジなるユニークなイベントも開催され毎年盛り上がるのですが、私は参加はせずいつも観客として楽しんでいました。

そしてその年のイベントはというと、「コーラ早飲み対決！」。今年も面白そうだね、と友人と話していたら、友人のお父さんで尚且祭りの実行委員長が私の腕を掴み、「すみちゃんも出なさい！」と無理くり早飲み対決に参加させられてしまったのです。当初は恥ずかしく出場するのが嫌で仕方がなかったのですが、いざ大会が始まると持ち前の負けん気が発動したのか、出るからには勝つ！という気持ちになり、一気にコーラを口に流し込みました。

結果はなんと 1 位！賞品を貰い、ウキウキしながら友人の元へ帰ると、何故か友人は困り顔。そして「その浴衣、大丈夫？」と私に一言。恐る恐る浴衣の胸元を見てみると、さっき飲んだ時こぼしたのか、大きなコラのシミが！嬉しかった気持ちが一気に冷め、足早に帰宅。親には怒られ、貰った賞品は弟に取られ、散々な 1 日になってしまいました。しばらくの間、無理くり参加させた友人のお父さんを恨み続けました(笑)

今では、笑いのネタになる楽しい思い出の 1 つです。

5.60 年前の事です。子供の頃小諸のお祭りが凄く楽しみで、7 人姉弟の3番目だった私は母と下の4人を連れてバスで小諸駅に向かいました。

町の中心の大きな交差点に行くと必ず亡き父が安協のカッコいい姿で、笛を吹きながら車や歩行者そして神輿や踊り連を裁いていました。そんな中私達の顔を見ると必ず小遣いをくれたのです。その凛々しい姿は今でも脳裏に焼き付いて偉大な父を思い出します。

普通なら自分の家族とお祭りに行きますが 父は皆の安全の為必ず安協の頭になって指揮をしてました。本当なら家族揃ってが羨ましく思う年頃でしたがなぜかこの光景が当たり前に育ちました。昔若い頃は 警察官だった血が市民の安全を守るという志しを忘れなかつたのですね。縁の下のスタッフさんには頭がさがります。今はコロナ禍でお祭りはほぼ中止や縮小されていますが、昔の頃の様な盛大なお祭りになることを願っています。

夏になると私が思い出すのは、小学生の頃の夏祭りです。妹と二人で、ワクワクしながらチョコバナナをほおばり、リンゴ飴をなめて、盆踊りを踊って。次はどこに行こうか。偶然目に入った、射的をやってみよう！と駆け出しました。

二人とも射的は初めてで、弾はあちらこちらに外れればかり。それでも大笑いしてとても楽しい時間でした。もう弾も少なくなつて終わりに近づいた頃、何と私の放った弾が、大きな箱に命中したのです！嬉しくて嬉しくて二人でハイタッチ。気になるその箱の中身は…当時人気があったプラモデルだったのです。二人とも少し戸惑いましたが、姉妹でプラモデルで遊ぶのもいいよね！と喜んで歩き出しました。

ふと気付くと、同年代の男の子が私達の後ろを着いてきていました。「いいなあ。プラモデル欲しいなあ。」と言いうながら。私達は迷うことなく目で合図して、これは二人で遊ぶもの！とそのまま歩き続けました。その後もその男の子は羨ましそうに私達に着いてきました。でも、両親と合流したときにはその子はもういませんでした。

あれから 20 年以上が経ち、あの時のプラモデルは今も実家の物置に手付かずの綺麗なまま置いてあります。それを見ると、遊ばないのなら、あの男の子にあげた方が良かったのかな？という気持ちと、来年小学生になる息子が、きっと喜んで遊ぶからこれで良かったんだ！という気持ちが入り交じります。
少し申し訳ない気持ちを抱えつつも、来年息子と一緒にプラモデルを組み立てるのを楽しみにしています。

子供の頃、母の実家がある兵庫県に毎年帰省していました。小学4年生の夏、始めて親戚のお姉さんと二人で姫路城の夏祭りに行った時のこと。

途中で喧嘩をしてしまい、お互に他方面に歩き出しまいました。二人共相手が追って来るに違いないと思い込んでいました。気がつくと、相手の姿はなく広い姫路城夏祭り会場の中で迷子になってしまいました。昔のことですから、携帯など持っていないません。結局は迷子センターにお互いが助けを求め一時間後には涙の再会ができたのですが、この事を親に言うと怒られるので二人だけの内緒事にすることになりました。

50年以上前の出来事になりますが、未だに二人の両親はこの件を知りません。が、毎年帰省時に二人が顔を合わせると、このときの話になり、笑ってしまいます。二人の絆は今後も永遠です 😊

いつもお風呂に魚のおもちゃを浮かべて、網でくつっていた子供たち。お祭りの日、初めて金魚すくいができる♪とすごく楽しみにしていました。しかし『ぽい』を水に入れたらすぐに破れてしまい、金魚をすくうことも出来ずにしょんぼりして帰ってきました。

がっかりしている子供たちを見て、次の日父が『ぽい』を手作りし、「金魚すくいの特訓するぞ！」と言うと子供たちは大喜び♪しかも、たらいに入れた金魚を次々と捕まえていくではありませんか。子供たちは上手くなつたー！とさらに大喜びで何度も金魚すくいを楽しんでいました。私も昨日の今日で上手になるもんだなあ～と見ていましたのですが…

ふと、この『ぽい』全然破れない？と気づいたのです。見た目は普通の『ぽい』なのに金魚が暴れても破れないんです！父に聞いたところ、ちょうど良い紙を見つけたから作ったとのこと。それは清書用の高級書道半紙でした。作った本人も、ここまで破れないとは思わなかつたそうです。たらいにポンプをつけて、その年は何度も金魚すくいを楽しみました。ここ数年、夏祭りがないので特訓の成果を見ることが出来ませんが、来年こそは！と楽しみにしています。

夏の盆祭りの時期になると、私は風呂場とソウメンを思い出す。風呂場で満足そうな笑顔を浮かべるのは今亡き祖父だ。大正生まれの祖父は国鉄作業員として誇りを持って大いに働き、また青春時代を第二次世界大戦という動乱の中で過ごした。幼い私は張り切って流す祖父の背中と人生を物語る拳が大好きだった。

そんな祖父との絆をつなぎ止めるのは、長くて細い、今亡き祖母の茹でたソウメンだ。食卓に座り、野外からはセミと風鈴の音。目の前には細くてよく冷えたソウメンが置かれている。そこにあったのはありふれた家族の団らん。しかし二人が語ったありふれた日常や平穏な日々の大切さを、私は片時も忘れたことがない。

夏の盆祭りの時期になるとソウメンの味と風呂場にゆったりと浸かった日々を思い出す。

じいちゃん、ばあちゃん、共働きの親が留守の間育ててくれてありがとう。私もけっこない歳になつたが、家紋と家を守るために日々精進する毎日です。コロナ禍の大変な時代を私も生きていますが、遠くから聞こえる祭り囃子や縁日の明かり。当たり前の平穏な日々が戻る事を願いつつ、今年も風呂とソウメンを楽しみたいと思う。

1960年代、私は練馬区の豊島園の近くに住んでいた。豊島園のすぐ側に住んではいたが、園内のアトラクションに乗ったことはほとんどない。私の家は貧しく、両親は街の小さな鮮魚店で、朝から晩まで身を粉にして働いていた。小学生だった私は働き者の両親が大好きだったが、その一方で、流行りのおもちゃをいつでも買ってもらえて、毎週のように豊島園のアトラクションに乗って遊べる友達が、羨ましくて仕方なかった。

我が家唯一の贅沢は、夕涼みがてら、豊島園内を散策することだった。当時の豊島園は活気に溢れており、毎週末、様々なイベントが開催されて賑わっていた。夏になると提灯が掲げられ屋台が立ち並び、土曜の夜は花火が打ち上げられた。

幼い私には、夏のお祭りの喧騒も、食べ物の屋台の匂いも色彩も、全てが魅力的で心躍るものだった。だが、屋台で食べ物を買ってもらったことは一度もない。いつも横目に見ながら通り過ぎるだけ。両親の苦労を知っている身としては、買ってほしいとせがむこともできなかった。

だが唯一、屋台で買ってもらえた駄菓子がある。「ハッカパイプ」である。プラスチック製のキャラクター人形に笛がついていて、人形の中に入れられたハッカ砂糖を吸って楽しむ駄菓子だ。ハッカパイプをスパスパ吸っていると、何だか大人になれた気分がしたし、何より、両親に気を遣うことなく買ってほしいと言えることが、内心嬉しかったのだ。夏が終ったあとも、机の引き出しに大切にしまって、時々引き出しを開けては、心ゆくまで眺めたものだった。

ある夏の週末のこと。その日、豊島園では、焼き芋の早食い大会と、リンゴの早剥き大会が同時に開催されていた。私は、いまいち乗り気ではなかった両親の説得にかかり、父は焼き芋の早食いに、母はリンゴの早剥きにエントリーしてもらうことに成功した。父はどうだか分からないが、いざやるときはやる人だったし、母の包丁さばきは子どもの私でも見惚れるような腕前だったからだ。あの日、舞台の上で、わき目もふらず焼き芋を食べていく父と、細く長くスルスルとリンゴを剥いていく母を見守っていたときの興奮を、なんと表現すればよいだろう。あっさりと他の出場者を圧倒し優勝した両親が、副賞でもらった芋とリンゴの箱を抱えて、舞台からこちらに手を振ってきたとき、私は思わず、「お父さん！お母さん！」と叫んでいた。その瞬間、私の中の何かが、弾けて吹き飛んだのだ。

それは多分、貧しさゆえに降り積もってきた、心の澱だった。新しい文房具一つを買うのに躊躇するとき、豊島園のアトラクションや屋台を横目に通り過ぎるとき、そういうたびに抱いてきた鬱屈した気持ちが、全て綺麗に吹き飛んだのだ。あの舞台にいる優勝した二人は、他でもない私の父と母なのだと、嬉しくて嬉しい気持ちでいっぱいだった。

三人で笑い合いながら歩いた帰り道、鼻にスッと抜けていったハッカパイプの味は、きっと一生忘れない。

あれから半世紀が過ぎ、一昨年、豊島園は閉園した。私の両親も、二人ともこの世を去った。大往生だった。時が流れ、時代が変わっても、まるで昨日のことのように鮮やかに思い出すことができる夏の記憶は、私の大切な宝物だ。